

すくすく
たけのこ

“心を耕す” わくわく子育て

初夏の日差しに、若葉がまぶしく照り映える季節となりました。本校のなかよし農園にある水田も、間もなく「田起こし」をします。5年生の子どもたちは、初体験となる「田植え」を心待ちにしています。その水田の横では、虫かごをもった低学年の子どもたちが、笑顔で駆け回っています。まさに初夏は躍動の季節です。



さて、みなさんは『アリとキリギリス』という『イソップ物語』をご存知ですよね。でも、このお話、もとはと言えば、『アリとセミ』という題名だったそうです。セミがヨーロッパの北部ではなじみのない昆虫だったため、翻訳過程でセミがキリギリスに変わったとされています。

働き者のアリに、遊び好きのキリギリス。冬が来てキリギリスは、アリに物乞いをします。でも、アリはそれを断り、キリギリスは困ってしまう。こんなお話ですね。幼かった頃、「目先の楽しさばかりを追い求めていると、キリギリスのようになってしまうよ」と、よく母親から諭されたものです。



日本で当たり前になっているこの結末も、ブラジルの絵本では違います。なんとアリはキリギリスを迎え入れ、食べ物を分け合って一緒に踊って冬を過ごしたというのです。物語の結末は、その国の価値観によるところが多いと言われます。

「人生は短い。大切なのは生きることを楽しむこと。中南米の人々は、人生の主軸をそこに置く。た

だ貯め込むだけのアリの人生より、キリギリスの人生のほうが豊かだと考えている」と言うのです。もちろん、中南米の人々がすべてそうだと思うわけではないと思いますが、価値観の違いを考えさせられる興味深い話ですよ。

もう一つ、『イソップ童話』にまつわるお話をしましょう。

足の速いウサギと遅いカメが競走し、油断して眠ったウサギにカメが勝利する物語『うさぎとカメ』は、子どもたちの誰もが知っている定番のお話です。「ゆっくりでも着実に前進する大切さ」を教訓とするこの童話。でもこのお話も人や国によって解釈が異なると言います。



ある国際会議での話。ある国の学者は、ウサギとカメの競走自体が愚かだと力説し、ウサギにもカメにもそれぞれ良さがあることから、「個性の尊重」が童話の真意ではないかと述べました。一方、別の国の学者は、「共に生きる」ことがテーマだと主張しました。ウサギが横たわっているのに、なぜ声を掛けないのか。眠っているだけならいいが、病气やけがだったら大変だ。そんな時はウサギを起こして一緒にゴールを目指すことを子どもたちに教えたいと訴えたそうです。同じ話でも国や人が異なれば受け止め方も違うのです。

このように、子どもたちが身近に接する物語にも、世界の人々を理解する「鍵」があると感じました。と同時に、世界の様々な文化は、価値観を反映しており、国や人によっていろいろな捉え方・考え方があることを知ることが大切である、と思います。

私たちは、子どもたちと共に歩む中で、これからの時代や世界を生きていく上で必要なものは何か、ということをいつも自らに問うています。

子どもはある意味「自分で育つ生き物」です。親を中心とした人間社会と環境の下で、さまざまなることを吸収し、自分で成長していきます。それはよく耕された大地の中で、植物がぐんぐんと育っていく姿に似ています。



私が感銘を受けた創立者・池田先生のご指導に、次のような言葉があります。

「緑の枝を広げた大樹は、砂漠や岩の上には育ちません。それは、肥沃な大地にこそ育つものです。同じように、豊かな人間性を開花させ、人生の栄冠が実る人間の大樹になるには、いかなる大地に立って生きていくかが大事になります」
(『新・人間革命一巻』)

親をはじめとする私たち大人は、いつの時代にあっても、子どもの心という大地がどのような状態になっているかを見つめ、肥沃な土地にしておくことが必要だと思います。



子どもの成長を「畑」とそこに植える「作物」に例えて考えてみましょう。ここでいう「畑」とは、「子どもの心」です。そして、そこに植え付ける「作物」とは、生きていく上で必要な知識や技能、ルー



ルやマナーなどです。畑(心)は大地であり、内側から「耕す」ことが必要です。反対に作物を植え付けるとは、子どもの中にはない概念を「外」から教えていくことを指します。

もちろん両方が必要なわけですが、とすれば、後者に目がむいてしまいがちです。家庭教育の大きな役割は、前者である“心の耕し”にあるといつてよいでしょう。

では、子どもの“心を耕す”とは、どういうことでしょうか。モワハラ対策カウンセラーのJoe(ジョー)氏は、子どもの中にある感情や感覚に対し、驚きや共感などの肯定的な反応を返すことだ、と述べています。



先に紹介した童話の話
を思い起こしてください。子どもであっても、人には様々な捉え方があることを頭に入れておきましょう。そして、「そうなんだ。そう感じたんだね」「なるほど、おもしろいね」「すごい。そんな風に考えたんだ」というように、まずは「そうなんだ」「なるほど」と共感し、「すごい」と驚いてあげましょう。

「そうなんだ」「なるほど」や「すごい」という言葉は、子どもの“心を耕す”「宝の言葉」です。

畑で何を植え付け、育てるかにしても、土台となる「土(=心)」が重要です。よく耕された土は軟らかく肥えていて、どんな作物も実らせることができます。同じように、心を耕された子どもは“自分はここにいていいんだ”と安心できます。そして、自分で自分を励ますことができるようになります。

知識やマナーは、子どもの発達に応じて習得することができ、学校の先生や友達に教えてもらうことができます。しかし、“心の耕し”の作業は、子どもが信頼し、心を開いている親だからできることだと思うのです。

太陽に向かって、まっすぐ伸びていく木々の「若芽」を我が子の姿に重ねて、進んでいきたいものです。(晃)

